

(16)教育評価・自己点検・評価システム-I
講演番号:1-327

大学教育における組織的な質保証の取り組みのシラバス による検証

Verification of Systematic Quality Assurance of Education through Syllabus

○柿本 竜治^{*1} 山尾 敏孝^{*2}
Ryuji KAKIMOTO Toshitaka YAMAO

キーワード：シラバス、成績評価方法、教育の質保証

Keywords: Syllabus, Methods of Assessment, Quality Assurance of Education

1. はじめに

シラバスを学生に示す利点は、学習の流れを学生が理解し、円滑に授業を受けられ、また、教員にとっても、学生に対して円滑に指導を進められることなどが挙げられる。したがって、「教育の質保証」の第一歩は、シラバスにあると言えよう。熊本大学では、シラバス作成のためのハンドブックが各教員に配布されているこのハンドブックには、シラバス作成上のポイントやヒントが示されている。その中で特に重要なのは、「目標の具体性」、「到達目標の明示」、「毎回の授業内容」、「授業進度の明示」、および「成績評価基準の明示」の5項目であった。そこで、これら5項目について対応がなされているか、2008年度の熊本大学全学部全科目的シラバスの記述内容のチェックを行った。また、同時にシラバスに記述されている成績評価方法をチェックし、成績評価方法の分類も行った。

工学部では、「教育の質保証」の一環として JABEE による認証評価に積極的に取り組んでいる。この JABEE への取り組みがシラバスの記述に与えた影響も大きいと思われる。そこで、工学部が JABEE に本格的に取り組み出す直前の 2002 年度のシラバスについても同様にチェックし、2008 年度と比較し、シラバス作成や成績評価方法に影響があったか合わせて分析する。

2. シラバス記述内容調査の概要

シラバスの記述内容の評価は、先述の5項目について、各科目のシラバスが各項目に対応している・いないを、1・0の2値で表した。シラバスの「授業目標」の欄の記述が、具体的で、現実的で、そして測定可能な到達目標が明示してある場合は、「目標の具体性」および「到達目標の明示」の双方の評価を1としている。また、目標自体は具体的でないが、「学生は○○できるようになる。」といったように、受講後に学生ができる

*1 熊本大学政策創造研究教育センター

*2 熊本大学大学院自然科学研究科

いるべき行動が明示されている場合は、「到達目標の明示」の評価のみ1としている。「毎回の授業内容」、「授業進度の明示」の評価は、たとえば、半期の講義科目については、シラバスの「授業内容」の欄に、定期試験を含む15回分の講義内容が記述されていれば、双方とも1としている。毎回の講義内容の記述はなくとも、授業進度が分かる程度の記述がなされていれば、「授業進度の明示」の評価のみ1としている。「成績評価基準の明示」の評価は、成績に考慮する評価項目と合格ラインが明示されていれば、1としている。単に、成績に考慮する評価項目のみが明示してあり、合格ラインが明示されていない場合は、0としている。

成績評価方法は、授業内容にしたがい多様な評価方法がシラバスに記載されておりそのままでは分類出来ない。そこで、実際に記載されている成績評価項目の内容にしたがい「定期試験」、「中間試験」、「小テスト」、「演習・課題・レポート」、「出席・授業態度」、および「プレゼンテーション」の6つの成績評価項目に集約した。これら6つの成績評価項目の組合せにより、成績評価方法の分類を行っている。

3. シラバスの記述内容評価

シラバスの記述内容評価の全学の結果を図-1に示す。「授業進度の明示」については、約88%の科目で対応が出来ており、良好である。一方、「成績評価基準の明示」については、約15%の科目しか対応が出来ていない。「目標の具体性」および「到達目標の明示」については、「目標の具体性」に対応できている科目は約38%と低く、目標の記述が具体的でない傾向にある。

「厳格で一貫した成績評価」を実現していくためには、「成績評価基準の明示」とともに、具体的で、現実的で、そして測定可能な到達目標の設定に全学的に努めなければならない。

次に各学部の状況について説明する。教養教育は、全学の傾向とあまり変わらないが、「成績評価基準の明

示」が、全学よりさらに低く約5%の科目しか対応が出来ていない。文学部は、ここに掲げているチェック項目全体への対応が低い状況にある。また、法学部も「成績評価基準の明示」については、文学部と並び1%台である。教育学部や理学部は、「授業進度の明示」への対応は高い割合でなされているが、それ以外の対応が低い割合となっている。各項目に高い割合で対応しているのは、図-1に示すようにJABEEに取り組んでいる工学部である。それでも「成績評価基準の明示」について、33.4%でしかない。「成績評価基準の明示」へ高い割合で対応しているのは薬学部であり、61.1%である。薬学部は、「毎回の授業内容」への対応以外は、総じて高い割合で対応している。医学部も、「成績評価基準の明示」への対応以外は、総じて高い割合で対応している。

シラバスの記述内容に関するチェック項目に対して、全体的に高い割合で対応していたのは工学部であった。しかし、JABEEに本格的に取り組む直前の2002年度のシラバスの記述内容について同様の評価を行ったところ、「授業進度の明示」以外への対応は、かなり低い対応の割合であった。JABEEのようにシステム化された外部評価を取り入れたことにより、飛躍的に記述内容が改善されたことが分かる。

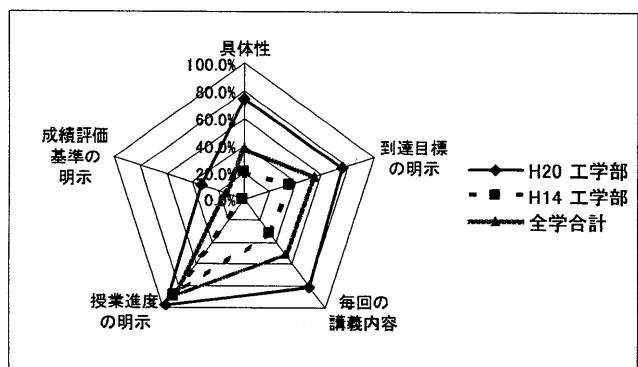


図-1 シラバスの記述内容評価の結果

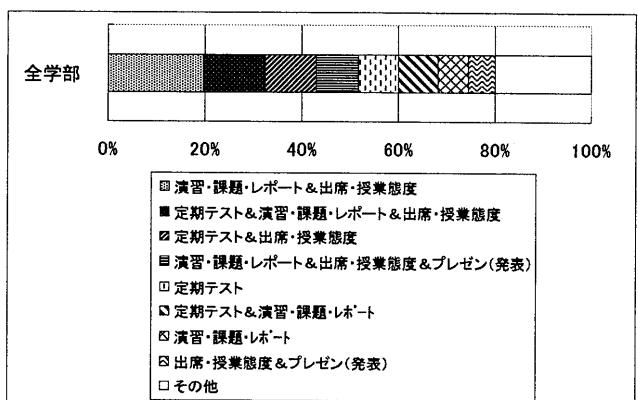


図-2 成績評価パターンの分布

4. 成績評価方法の分類と各学部の特徴

成績の評価方法が記述されていたシラバス2431科目をチェックし、6つの評価項目の組合せにより分類したところ41パターンの評価項目の組合せが確認された。図-2に示すように最も多かったのが、「演習・課題・レポート」と「出席・授業態度」の組合せによる評価で500科目近く確認された。次に多かったのが「定期試験」、「演習・課題・レポート」と「出席・授業態度」の組合せによる評価で300科目超、次いで「定期試験」と「出席・授業態度」の組合せによる評価で250科目超が確認された。成績評価項目の組合せの傾向として、大きく2つのグループに大別される。一方は、「定期試験」を主に他の評価項目と組合せにより成績を評価を行っており、もう一方は、定期試験を課さずに「演習・課題・レポート」等より成績の評価を行っている。

全学の教員が協力して行っている教養教育での評価項目の組み合わせパターンの分布は、全学の状況と同傾向にある。文学部、教育学部、および理学部は、「演習・課題・レポート」と「出席・授業態度」の組合せによる評価が最も多くなっている。一方、医学部および工学部は、「定期試験」と他の評価項目との組合せによる成績評価が主となっている。特に、工学部では、「定期試験」に「演習・課題・レポート」の評価を加味して評価している傾向にある。このような工学部の傾向は、JABEEに本格的に取り組む直前の2002年度の状況とさほど変化は見られない。評価項目の組合せに関しては、JABEEの取り組みの影響はあまりないようである。したがって、成績評価方法は、各学部のカリキュラム構成に依存しているものと思われる。

5. おわりに

本稿では熊本大学全学のシラバスの記述内容のチェックを行った。その結果、「授業進度の明示」については、全学的にある程度対応がなされていたが、「目標の具体性」や「成績評価基準の明示」については、対応がなされている科目の割合が低いことが確認された。JABEEに取り組んでいる工学部については、それ以前と比較して記述内容が明らかに改善されており、JABEE受診の効果がシラバス記述状況からも読み取れた。

本稿では、6つの成績評価項目の組合せにより成績評価方法の分類も行った。「定期試験」を主に他評価項目との組合せて成績評価を行っているグループと、試験は課さずに「演習・課題・レポート」を主に「出席・授業態度」や「プレゼンテーション」との組合せて評価を行っているグループの2つに大別された。いづれの組合せで評価を行うにしても評価方法が公正に運用されていることが重要であろう。